

A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

20

ジュール・ヴェルヌ

地底旅行 加藤晴久訳

南十字星 曾根元吉訳

中央公論社

新集 世界の文学 20

©1972

ジュール・ヴェルス

訳者 加藤晴久
曽根元吉

Illustrations:
by editions Hachette, Paris.

昭和47年9月30日初版印刷
昭和47年10月10日初版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

地底旅行

南十字星

解説

年譜

3

215

422

455

地底旅行



一八六三年五月二十四日。その日は日曜日だったが、叔父のリーデンブロック教授は、彼の小さな家に息せききって帰ってきた。叔父の家は、ハンブルクの旧市域でも最も古い通りのひとつであるケーニッヒ街一九番地にある。

婆やのマルテは、昼食の支度がひどく遅れたと思ったに相違ない。なにしろ、竈かまどの上で鍋なべがやとごとこといいはじめたところなのだ。

「やれやれ」と私は思った。「あの人一倍気短な叔父貴のことだ、腹がすいてでもいようなものなら、ひと騒動もちあがるぞ」

「もうお帰りですって、だんなさまが！」食堂のドアから顔をのぞかせて、マルテが驚きの声をあげた。

「そうだよ、マルテ。でもお昼の支度ができてなくなつて当然だよ。二時にはまだ間があるんだもの。教会の鐘

が半を打ったばかりだよ」

「それじゃ、どうしておもどりなんでしょうね？」

「それはきつと自分でおっしゃるだらうよ」

「そらお帰らだ。わたしは退散いたしますよ、アクセルさま。うまくなだめてくださいましな」

こう言つて婆やは彼女の研究室である台所にひっこんでしまった。

私はひとり取り残された。だが、教授たちのうちでも、とりわけ頼たの頼ぞう持ちの叔父をなだめることなど、どちらかといへば優柔不断な性格の私などの、よくなしうるところではない。そこで逃げるが勝ちとばかり、上の自分の部屋にもどりがけたとき、表の戸がぱたんと鳴った。そして、どかどかと木の階段を駆けあがってくる音がしたかと思うと、この家の主あるじが現われて、食堂を駆けぬけ、自分の書斎に飛びこんで行った。

しかし、そうして風のように通り過ぎながらも、ごつい握りのついたステッキを食堂の片隅に、けばだつたつば、広の帽子をテーブルの上にほうり投げ、甥おとこであるこの私に、響きわたるような大声で、投げつけたのだ、「アクセル、来るんだ！」

身動きひとつするいとまもない。すぐにじりじりした

となり声がとんでくる、

「おい！ なにをぐずぐずしている！」

私はわが恐るべき師の書齋にとんでいった。

オットー・リーデンブロックは意地の悪い人間ではない、それはもちろん私も認める。しかし、よほどの変化でも起こらないかぎり、彼の猛烈な変人ぶりは死ぬまでなおらないだろう。

彼はヨハネウム学院の教授で、鉱物学を担当していたが、授業中に一度や二度はかならず怒り出すのである。

といっても、学生の出席率が高いとか低いとか、講義を注意深く聞いているかどうかとか、試験の成績が良いとか悪いとかを気にしていたわけではない。そんな些細なことはほとんど眼中になかったのだ。彼は、ドイツ哲学流に言えば、『主體的』に講義をしていたのである。自分のためであって、他人のためではないのだ。エゴイストな学者で、井戸のように深い学識の持主でありながら、他人がなにか汲み取ろうとすると、井戸車が軋んでくる始末。要するに、けちんぼ、学者なのであった。

ドイツには、ときどきこういうタイプの学者がいる。

不幸にして叔父は、内輪どうしの場合とはかく、聴衆の前で話す場合には、発声よどみなくなめらかという

にはほど遠いものがあつた。もちろんこれは教壇に立つ者にとっては、はなはだ嘆かわしい欠点である。学院での講義中、教授は急に言葉につまってしまうことがよくあつた。喉まで出かかっていながら、どうしても思うようにならない強情な言葉とたたかっているのだ。それらの言葉は、さんざんにてこずらせ、ふくれあがる。そしてついには、ののしりというきわめて非科学的な形をとって、教授の口から飛び出してくるのであつた。そこで、地団太を踏んで悔しがることになる。

困ったことに、鉱物学には、なかばギリシャ語、あるいは、なかばラテン語の、発音にくい名称、詩人ならとても口にする気になれないような、ごつごつした名前がたくさんある。私は鉱物学にけちをつけるつもりは毛頭ない。しかし、菱面体晶系だの、瀝青状樹脂だの、ゲレーナイトだの、ファンガサイトだの、鉛化モリブデン酸塩だの、マンガンのタングステン酸塩だの、ジルコニウム・チタン酸塩だのを相手にしたのでは、どんなに定めらかな舌でもとちつてしまうのもやむを得まい。

というわけで、このような叔父の罪のない弱点はハンブルクじゆうに知れ渡つていたのだが、人々はそれをおもちゃにする始末だつた。いくらドイツ人でも、あまり

良い趣味とは言えないのだが、叔父の口調が危なくなるのを待ち掛け、湯氣を立てて怒り出すのを見て、笑うのであった。リーデンブロック教授の講義には、聴衆がいつもわんさと押しかけてきたが、その熱心な連中のうちには、教授が癩癩玉を破裂させるのが楽しみでやってくるのが幾人もいたのだ！

いずれにせよ、叔父が本当の学者であること、これは私が何度でも請け合うところだ。あまり乱暴に取り扱いすぎて、標本をこわしてしまうことはあったが、地質学者としての天才と、鉱物学者としての慧眼（けいがん）を兼ね備えていた。鉱物用ハンマー、たがね、磁石、吹管、硝酸鹽（ばい）などの七つ道具を持たせると、ちよつと右に出る者がないくらいだった。どんな鉱物でも、割れ口、外見、硬度、可溶性、音、におい、味などで、鉱物学が今日までに発見した六百種のうちに、たちどころに分類してしまうのだ。

こうして、リーデンブロックの名は内外の学界に誉れ高く鳴り響いていた。ハンフリー・デイヴィ卿（一七七九～一八二九、イギリスの）、アレクサンドル・フォン・フンボルト男爵（一七六九～一八五九、ド、ドイツの博物学者、探險家）、ジョン・フランクリン（一七九一～一八四七、イギリスの探險家）およびエドワード・サヒン（一七八八～一八八三、イギリスの物理学者）

（探險）両船長などは、ハンブルク滞在の折は、かならず教授を訪問した。アントワヌ・ベクレル（一七八八～一八七八）、ジャック・ジョゼフ・エベルマン（一八一四～一八五二、フ）、デイヴット・ブルスター卿（一七八一～一八六八、イギリスの物理学者）、チスト・デュマ（一八〇〇～一八八四、フ）、アンリ・ミルヌリエドワール（一八〇〇～一八五五、フ）、アンリ・サントリクレール（一八〇一～一八八八、フ）、の諸碩学は、化学の最先端を行く諸問題について、好んで叔父の意見をただしてきたものだ。化学は叔父に、いくつかの、なかなか重要な発見を負っているが、事実、一八五三年には、オットー・リーデンブロック教授著わすところの、図版入り、大型二折判の大著『超、越、的、結、晶、学、概、論』がライプチヒで発行されている。もっともこれは元が取れない出版ではあったが。

さらに付け加えれば、叔父は、ロシア大使のウイヘルム・シュトルーベ（一七九三～一八六四、ロシアの天文学者）閣下の、全ヨーロッパに名高い貴重なコレクションから成る、鉱物標本館の責任者であった。

いかにもじれったそうな口調で私を呼びつけたのは以上のような人物であった。瘦身の大男、鉄のように頑健で、若々しいフロントの髪のおかげで、五十歳あまりだ

が、優に十歳がとこ若く見える。大きな目が、威圧的な眼鏡の向こうで、絶えずぎょろついている。長く細い鼻はまるで鋭い刃物のようだ。口がなない連中は、あの鼻は磁石になっていて、鉄粉を吸いつけると言いふらしている。まったくの中傷だ。実際には、煙草を吸いつけるだけだった。ただしこれは、大量に、と言わないと嘘になるが。

さらに加えて、叔父は一メートルもの大股で、規則正しく歩く、また、烈しい気性の現われたが、歩行中も、こぶしを堅く握りしめている、と言えば、充分に叔父を識ったことになるだろう。そして、だれだって叔父のお相手をとめることに尻込みすることだろう。

彼の住んでいたケーニッヒ街の小さな家は木と煉瓦でできた、鋸の歯のような切妻屋根の建物だった。一八四二年の大火を幸いにして免れた、ハンブルクで最も古い区域を縦横に走っている曲がりくねった運河のひとつに面していた。

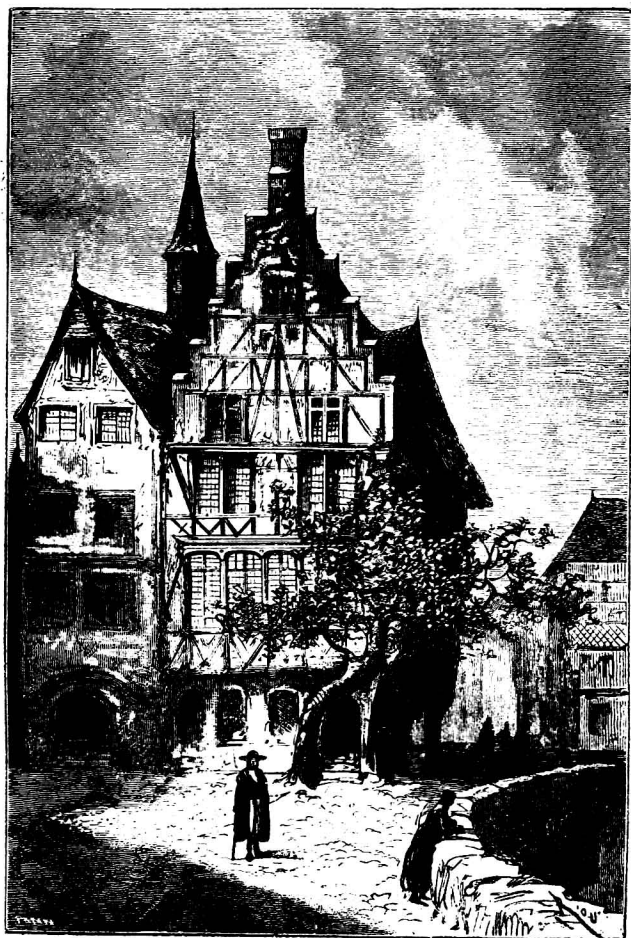
古い家は傾きかけ、横腹を通行人に突き出していた。屋根は道德会（一八〇八—一六に存続したド）の学生がかぶっていた制帽のように、耳にかぶさるように、片側に傾斜している。縦の線も垂直とは言いかねるが、概して、その

家はしっかりと立っていた。それは、建物の正面にがちりとはまっている、そして春になると、窓ガラス越しにはなやかな芽を吹き出すのが見える榆の古木のおかげだった。

とはいえ叔父は、ドイツの教授としては裕福なほうだった。家は、容れ物も中身も、そっくり彼のものだった。中身とは、すなわち、芳紀まさに十七歳、フィルラント生まれの乙女である、名付け子のグラウペンと、婆やのマルテ、それにこの私である。甥および孤児としての二重の資格で、私は叔父の実験助手になっていたのだった。私は地学の研究に食欲に食いついた。私の体内には動物学者の血が脈うっていた。だから、大好きな石ころと一緒にいれば、退屈したりするようなことはけっしてなかった。

要するに、このケーニッヒ街の小さな家の主人は癩癩持ちだったが、そこでの生活は楽しいものだった。というのも、たしかに叔父は少しばかり乱暴な振舞いは多かったが、この私を愛してくれていたからだ。ただ、叔父は待つということのできない人なのだし、人並はずれてせっかちな人だったのだ。

この四月に、サロンの陶器の植木鉢に木犀草だか昼顔



だかを植えたときも、毎朝決まって、成長を早めるために葉を引っ張っていたものだ。

こういう変り者相手では、言うことを聞くほか手はない。私は叔父の書斎に飛んでいった。

二

書斎はまさに博物館そのものだった。鉱物界のありとあらゆる標本が、燃料鉱物、金属鉱物、石材の三大区分に応じて、実に見事に整理されて並んでいた。

これらの鉱物学上の珍品は、私のお馴染みだった！

同じ年頃の男の子たちと遊び戯れる代わりに、幾度となく私は、これらの石墨、無煙炭、石炭、亜炭、泥炭などの埃を払って楽しんだものだった！それに、この瀝青や、樹脂や有機塩類！どんな細かい埃にも神経をとがらせていなければならなかったものだ！それにこれらの金属！鉄から金にいたるまでの金属の相対的価値も、科学の標本という絶対的平等性の前では、消滅してしまう！さらにまた、これらの石の標本！これだけあれば、この家を建て直すことだってできるだろう、そのうえ、小ぎれいな部屋をひとつ建て増しすることだって。私の部屋にしても悪くない！

だが、書斎に入っていったときは、それらの貴重な標本のことなど考えているゆとりはなかった。叔父のことだけで頭はいっぱいだった。彼はユトレヒト製ビロードの張つてある大きな肘掛椅子に深々と身を沈めて、両手に一冊の本を持ち、感嘆措くあたわざる表情で見つめていた。

「たいした本だ！ 実にすばらしい！」

この感嘆の叫びを聞いて私は、リーデンブロック教授が、仕事の合間には、本マニアでもあることを思い出した。ただし、およそ叔父の目には、どこを探しても見つからぬとか、手に入っても読めないとかいう本でなければ、三文の値打もない。

「よいか、これがわかるかな？」と叔父は言った。「これはな、どえらい珍本だぞ。今朝、ユダヤ人のヘヴェリウスの店をあさって見て見つけたのだ」

「すばらしい本ですね！」仕方なく、さも感心しきつたように私は答えた。

正直なところ、こんな古ぼけた四折判の本のために、そんな大騒ぎをして、なんになるのだ？ 背と表紙が仔牛の粗皮でできている、そして色の褪めた栗紐しおりのものぶらさがった、黄ばんだ古本などのために？

しかしながら、教授の感激はとどまるところを知らなかった。

「ほれ」自分で自分に問いかけては答えながら、彼は続けた。「悪くないだろう？ いや、すばらしい！ それに製本がなんともいえぬ！ 開きぐあいはいいかな？ もちろん、どのページを開いてもうまいぐあいだ。では閉じぐあいは？ それもよい。表紙と中の紙が実にしっかり合わさっていて、ばらついたり、隙間になったりしているところがまったくない！ それにこの背皮はどうだ！ 七百年も生きながらえているというのに、ひびひとつないときている！ これこそ、あの名装幀家のボゼリアンや、クロスや、ピュアゴールドも鼻を高くするような製本だ！」

こう言いながら叔父は、その時代のついた古本を開いたり閉じたりしていた。私にはまったく興味はなかったけれども、中身のことをたずねないわけにはいかなかった。

「その素敵な本の題はなんていうのです？」と、私は勢い込んで聞いたのだが、度が過ぎて、かえってわざとらしい声になってしまった。

「この本か！」と、叔父は興奮して答えた。「これは、

スノッリ・スツットルソン（二二七八—二四一）、十二世紀アイスランドの高名な著作家だったあのスノッリ・スツットルソンの『ヘイムスクリングラ』だ！ アイスランドを統治した、ノルウェーの歴代君主の年代記なのだ！」

「本当ですか！」と、私は精いっぱい驚いてみせた。「で、そのドイツ語訳ですか？」

「ふん！ 翻訳だ！」と教授は憤慨して言い返した。「翻訳なんかをこのわしが必要と思うのか？ だが私が翻訳なんぞ相手にすると言った？ これはアイスランド語の原書だ！ 実にいろいろな文法的組み合わせと無数の語形変化が可能な、豊かにしてかつ簡潔な、あの見事な言葉で書かれているんだ！」

「ドイツ語のような言葉ですね」と私はうまく水を向ける。

「そうさ」と、叔父は肩をそびやかせて答えた。「ただし、アイスランド語はギリシャ語のように性が三種類あるし、ラテン語のように固有名詞が格変化するけれどもな！」

「ほう！」と、どうでもよいとは思いながらも、多少は心を動かされて、私が言う。「で、その本の活字はきれいですか？」

「活字だと！ このばかもん！ だれが活字の話などをしてる？ 活字だなどとぬかしおるわ！ アクセル、おまえはこれを刊本だと思ってるのか？ 無学者めが写本だ、ルーン文字の写本だ！……」

「ルーン文字ですって？」

「そうだ！ 今度はルーン文字ってなんですか、とても聞くつもりかな？」

「まさか」と、自尊心を傷つけられた男の口調で私は言い返した。

しかし叔父は図に乗って話し続けた。そして、こちらの気持などおかまいなしに、私が知りたいとも思っていないことを教えてくれた。

「ルーンというのはな、昔アイスランドで使われた文字で、伝説によれば、オーディン（北欧神話で、戦知恵の神）みずから発明されたということだ！ まあ、とにかく見てみる、この罰あたりめ、神の想像力の賜物をおがんでみる！」

いやはや、返答に窮して、私はうやうやしく平伏することにした。これこそ神々にも王にもお気に召す返答というものだ。なにしろ、これには彼らのご機嫌をそこなうようなことは決してないという利点がある。そのとた

みである。話の方向を一変させてしまうことが起こった。手垢に汚れた一枚の羊皮紙が本の間から滑り落ちたのだ。

叔父は脱兎の勢いでその代物に飛びついた。もちろんそれは無理もないことである。古びた本の間に、いつとも知れぬ遠い昔からはさまれていた古文書が叔父の目に値打をもたぬはずがない。

「これはなんだ？」と彼は大声で叫んだ。

そして、横十四センチ、縦八センチぐらいの羊皮紙を、机の上にていねいにひろげた。と、そこには、左から右に、なんともわけのわからぬ文字が書きつらねてあった。

それを正確に模写したものをここ（次ページ）に掲げておく。この不思議な記号をぜひとも見ていただきたい。まさにこいつらのおかげで、リーデンブロック教授とその甥は十九世紀でもっとも奇想天外な探険を企てることになったのであるからである。

教授はこの文字の羅列をしばらく見つめていた。それから眼鏡を額にずり上げて言った。

「ルーン文字だ。この書体はスノッリ・スツットルソンの写本の書体とまったく同じだ！ だが、……いったい

天. 天. 天. 天
 天. 天. 天. 天
 天. 天. 天. 天
 天. 天. 天. 天
 天. 天. 天. 天
 天. 天. 天. 天
 天. 天. 天. 天

天. 天. 天. 天
 天. 天. 天. 天
 天. 天. 天. 天
 天. 天. 天. 天
 天. 天. 天. 天
 天. 天. 天. 天
 天. 天. 天. 天

天. 天. 天. 天
 天. 天. 天. 天
 天. 天. 天. 天
 天. 天. 天. 天
 天. 天. 天. 天
 天. 天. 天. 天
 天. 天. 天. 天

なにが書いてあるのだ？」

ルーン文字などというのは世人をたぶらかすために学者のでっちあげたものと考えていた私は、叔父が羊皮紙をてんで読めないのを見て、小気味がいい思いをした。

とにかく、叔父の指先が発作のようにふるえはじめたところから、私はそう判断したのだった。

「しかしこれは古代アイスランド語にはちがいないんだが！」と、もぐもぐ言っている。

それならリーデンブロック教授にはお茶の子のはずだ。なにしろ教授は語学の天才と称せられていたのだから。

地球上で使われている二千の国語と四千の方言を自由に話せる、というほどではないにせよ、まあかなりの数は知っていたのだ。

この難問をまえに、教授はもちまえの激しい気性を発揮するに相違なかった。これはひと悶着あるぞと思っているうちに、マントルピースの上の掛け時計が二時を打った。

とすぐに、マルテが書斎のドアを開けて告げる。

「お昼でございますよ」

「悪魔に食われてしまえ、飯なんぞ！ そんなものを料理したやつも、食うやつもだ！」

マルテは逃げていってしまった。私はすぐその後を追
い、どうしてかわからぬが、食堂のいつもの自分の席に
坐った。

しばらく待った。教授はやって来ない。私の知るかぎ
りはじめてだ、教授がお昼のおごそかな行事をすっぽか
したりするのは。それにしても、豪華な昼食だった！
パセリ入りのスープ、ナツメグを利^きかしたすいば入りハ
ムオムレツ、仔牛の背肉にブラム・コンポートのアント
ルメ、デザートには小えびの砂糖煮、そして、飲物とし
てはモーゼル特産ぶどう酒といった次第。

一枚の反古紙のために、こんなご馳走をふいにしてし
まおうというのだ。忠実な甥たる私としては、自分のた
めばかりか、叔父のためにも大いに食べなければならな
いと考えたことであった。その義務をまごころこめて遂
行した。

「こんなことはじめてのことでございますよ！ だんな
さまが食事をなさらないなんて！」と、マルテが言う。

「信じられないね」

「なにか大変なことが起こる前ぶれですよ！」頭を振り
振り老婆がこぼす。

私を見るところでは、なんの前ぶれでもありはしない。

ただ、ご馳走が食い荒らされてしまっているのを見たら、
大騒ぎになるだけのことだ。

小えびを平らげようとしていると、突然、大声が鳴り
響いてきた。デザートに舌鼓を打っていた私は飛び上が
った。食堂から書斎に横っ飛びにすっ飛んでいった。

三

「まちがいなくルーン文字だ」眉根に皺^{しわ}を寄せて教授は
言った。「だがこれにはなにか秘密がある。見つけ出し
てくれるぞ、さもなければ……」

荒々しい身振りが続きの言葉を補った。

「そこに坐って、筆記してくれ」と拳骨^{げんこつ}で机を指し示し
て叔父が言った。

私はすぐに筆記態勢にはいった。

「いいか、このアイスランド文字に相当するアルファベ
ットをひとつひとつ言うからな。どんな文章になるかお
楽しみだな。だが、くれぐれも間違っはいかんぞ！」

書き取りが始まった。私は最大限の努力をした。文字
がひとつずつ読み上げられ、次のようなわけのわからぬ
順序に並んだ。